

令和5年度 総合教育会議 会議録

- 1 と き 令和5年9月27日（水）14:00～15:15
- 2 ところ 大垣市役所4階 市長公室1
- 3 出席者 石田仁市長、豊田富士人副市長、細江敦教育長、
河合保孝教育委員、堀哲也教育委員、沼口諭教育委員、松岡敦子教育委員
- 4 事務局 奥田企画部長、毛利こども未来部長、安田地域創生戦略課長、藤埴地域創
生戦略課長、平松教育委員会事務局長、鈴木庶務課長、伊藤学校教育課長、
山田教育総合研究所長
- 5 傍聴者 なし
- 6 議 題 大垣市の小中学校における不登校対応について
- 7 会議録

発言者	発言概要
石田 市長	それでは、ただいまより、令和5年度大垣市総合教育会議を開催しま す。今年度の議題は、大垣市の小中学校における不登校対応について でございますが、委員と意見交換する前に、事務局から説明をお願い します。
山田 教育総 合研究所長	大垣市の小中学校における不登校対応について 不登校児童生徒は全国で増加傾向にあり、特に中学生が増えている。 そのような中、今年度は、不登校特例校の学校法人西濃学園と連携協 定を締結するなど、支援体制の強化を進めている。 現在は、教室に行けない児童生徒を対象とする「ほほえみ相談員」 24人を小中学校に配置するとともに、学校に行けない児童生徒を対象 とする「ほほえみ教室」をスイトピアセンターに開設し、不登校児童 生徒に学びの場を提供している。 今後は、自宅から出ることが難しい児童生徒が、まず自宅を出て、

発言者	発言概要
	関心のあることに取り組める居場所の新設を検討する。
石田 市長	それでは、教育委員の皆様から、ご意見を頂戴したいと思います。河合委員ご意見をお願いします。
河合 委員	不登校生徒に対する対応は、素晴らしい形でできていると思っていますし、人事面等についても充実してきていると思っています。 不登校になった児童生徒に対する対応はできていると思いますが、その前の早期発見、未然防止という部分が、教育総合研究所や学校だけではなかなか難しく、さらに言うならば、教育の一貫通貫の1つとして大きく関わってくるのではないかと考えています。 無気力・不安という要因の中に学業不振があり、特に中1から中2にかけての新規の不登校者数が一気に増加しているデータを見させていただきました。受験のための勉強とか、教科の強化ばかりをしていくような、「学校教育の塾化傾向」といった学校教育ではなく、生徒のやりたいこと、自信になるようなことをもっと伸ばしてあげられるような教育をしていく必要があると思っています。 例えば、部活で水泳が上手な子であれば、学業は苦手かもしれませんが、そういった1つ自分が自慢できる、他の生徒から「すごいね」と言われるようなことがあると学校に行くのも楽しいです。他者から認められるようなことが教育の中で必要ではないかと考えています。 ただ受験のための5教科を一生懸命に良い点を取りなさいといった教育ではなく、全体としての教育というものを、学校教育の中でもしていただきたいですし、生徒指導という観点から指導できる先生が必要であると思っています。 そういった先生が今は少ないと言ったほうが良いかもしれません。特に、今は部活動の地域移行がありますが、部活動をやっている先生には、生徒指導に長けている先生が多いですから、そういった点でも部活動と併用して、先生方の育成が必要だと思います。 それから、冒頭に言いました一貫通貫の未然防止につきましては、コミュニケーション能力の育成が未然防止対策の1つとして書かれていました。不登校になってしまってからではなく、小学生、中学生でもなく、保育園や幼稚園といったところから、コミュニケーション能力を身に付けられるような教育を充実させることが必要になってくる

発言者	発言概要
河合 委員	のではないかと思います。 今はもう1歳から入園していますし、現実的には、1歳から2歳児の60%は入園しています。昔はおじいちゃんやおばあちゃんが家庭にいましたので、親以外の大人とも接することができましたが、今はもうほとんど核家族ですので、1歳から4歳の幼児については、そういった機会がありません。親以外の大人と接する機会や、子ども同士の接する機会、そのような中でコミュニケーションは自ずと身に付いてくると思いますので、小学校、中学校になってからコミュニケーション能力が足りないから、不登校になってしまったという話ではなくて、やはり幼児教育や保育教育の段階から、そういったことを身に付けていく、そんな機会を作り、教育も充実させていただければ、不登校の未然防止となると思っています。 最後に、今回のデータは、文部科学省のアンケートに先生たちが答えデータです。それも大事ですけれども、そうではなくて、過去に自分自身が不登校になった人が大垣市の中にもいらっしゃると思いますが、今現在20歳になったり、学生になったり、社会人になった人に、その当時のことを振り返っていただいて、自分が不登校になった時、実際どうだったのか、どういったところにもっと支援して欲しかったのか、どういったところを手当てして欲しかったのか、そういったことをぜひアンケート調査して施策に反映させていただきたいと思いました。
石田 市長	ありがとうございます。今日はこども未来部長にも同席してもらっていますが、保育園や幼稚園の頃から、しっかりコミュニケーション能力を身に付けていけるようにしていきたいと思います。 続いて、堀委員ご意見をお願いします。
堀 委員	不登校の要因の中で1番多いのは無気力・不安で、本人にかかる状況が1番多いというのは以前から聞いており、それは児童生徒の状態であって、原因ではないと前から思っていたのですが、そこからさらに細かく分析をされ、対応されていることについては、非常に良いことだと感じています。 不登校の子どもたちに教育の機会をしっかりと提供することが大事だと思いますし、学校に来られないからといって、学びの選択肢がなくなってしまうのは、非常に残念なことだと思います。また、学校以

発言者	発言概要
堀 委員	外の居場所が無いと、どんどん孤立してしまうのではないかと思います。 教育委員会や学校が、色々な選択肢を提示できる仕組みを作っていくべきだと思っており、そういう意味では、今回の西濃学園との連携協定は、これからの課題の解決はもちろんのこと、先生の対応スキルの向上や、保護者の不安を少しでも解消できるような方向に繋がれば良いと思っています。 取り組みの中でも説明がありましたけれども、未然防止や早期発見は、初動が1番大事だと思います。不登校というのは、特別なことではなくて、何らかのきっかけで誰にでも起きてしまうということを前提として対応を構築していくことが大事だと思いますし、相談することに抵抗をなくすような工夫も必要だと思います。 また、不登校の要因というのは、それぞれ違うと思いますので、教育委員会や学校だけではなく、様々な機関と連携し、情報共有していくことについては今後の取り組みとして非常に有効だと思います。 さらに、子どもたちの居場所を作ることが非常に大事だと思います。不登校になったとしても、将来も含め、自分の事を考える良い機会と捉えて、ちょっと休憩する時間もある必要ではないかと思っています。自立の仕方やスピードは、個々によって全然違うと思いますし、色々な悩みを抱えながら成長していくのも1つだと思いますので、そういった子どもたちに寄り添い、一緒に歩いていく仕組みが必要だと思います。 不登校の子どもたちを支える、まわりの方々を支えることも大事だと思います。特に保護者は不安で、色々な思いがあると思いますので、安心してお話しいただける場所が必要だと思います。打ち明けることにより親の気持ちが楽になり、それにより、子どもも変わることもあると思いますので、専門的な知識をもった方に相談できる場所を準備することが非常に大事だと思います。
石田 市長	ありがとうございます。本当に原因はそれぞれ違いますし、一人ひとりに寄り添っていかなければいけないと考えています。今はメンタルフレンドが、ご家庭から出られない子どもたちにお声掛けしていますけれども、なかなか心を開くまで時間がかかるという話も先生から聞いております。

発言者	発言概要
	全員に合ったものというのはなかなか難しいですが、来年度からは少し方向の違う受け皿を準備していこうと考えています。 続いて、沼口委員ご意見をお願いします。
沼口 委員	未然防止、早期発見、早期対応がすごく大事なことだと思いますので、先ほど委員が言われたように、幼少時からの発育特性などはおそらく何らかの形で影響してくるだろうと思います。 そういう方々については、例えば保健センターと連携することになると思いますが、連携をとりながら、ある程度特性を知った上で注意深く関わり、子どもたちとコミュニケーションを行えば、また変わってくるのではないかと思います。ただ、個人情報の問題などがあるので、そういった点を注意した上で、連携していくことが必要だと思います。 実際に外来診療で見ている、お子さんがお母さんと一緒に来られた時に、実は学校に行っていないですという話になる時があります。話を聞かせてもらおうと、要因ははっきり分からないという方が多いです。きっかけがあって、それを排除すれば何とかなるという話ではなく、色々な方がいらっしゃいます。学校には行けないけれども、勉強も意欲が無いわけではないですと言われる方もいるので、そういう方々に対する学習の機会も必要だろうと思いました。 幼少期でも、昔はある程度家庭におじいちゃんやおばあちゃんもいて、たくさん家族と多くのコミュニケーションが取れた環境でしたが、それが核家族になって、小さい頃から保育所での生活時間が長く、コミュニケーションが少ないご家庭が増えてきている印象もあります。だからこそ、色々な人と話ができるコミュニケーションの場の検討もされていると思いますけれども、昔と違ったコミュニケーション能力を考えていかなければならないということで、先生方も非常に苦労していらっしゃるのではないかと考えています。 繰り返しになりますが、新しい学びの場ができるというのはすごく大事なことですし、効率よく知識を詰め込んでいくという事とは違った方法が求められていると思います。 また、丁寧に話を聞いていくことが、基本的には大事なことです。全体的にこうすれば良いという解決策は無いと思いますので、ほほえみ相談員などが中心になって、場合によっては臨床心理士など

発言者	発言概要
沼口 委員	にも聞いていただいて、個別的に対応していくことが大事だと思います。 大人も、メンタルが不安定というか、色々な悩みを抱えている方が非常に多くなっていて、これは社会の構造の問題だと思いますけれども、子どもたちも、そういう社会の歪みの中で、同様の状態になっているのだらうと思っています。そうすると、心理的な部分でのサポートを丁寧にしていくことが、大事になると思います。 あと、もう一つは、西濃学園と連携しながらノウハウをいただいて、教員がしっかりスキルを身に付けることも大事だと思います。 さらに、学校医として中学校に行って、教員の相談を受けていると、結構教員も病んでいると思うことが多いです。働き方改革の一方、色々やることがあって大変そうだと思いますが、先生には頑張ってもらわないといけないので、そういう先生にも配慮してもらえると良いなと思いました。 最後に、PTAも含めて、親の不登校に対する考え方が大事だと思います。誰でも不登校になる可能性はあると思いますので、自分の子は大丈夫だから関係ないではなく、みんながそういう可能性を持っているということを知った上で関わっていかないと、上手くいかないと思うので、啓発や啓蒙が大事だと思います。
石田 市長	ありがとうございます。先生方も不登校対策だけではなく、通常の授業もしなければいけませんし、昔よりもやる事は確かに増えているでしょうから大変だと思います。 全方位的に教育委員会としては対応していかなければならないと思っています。 続いて、松岡委員ご意見をお願いします。
松岡 委員	たくさんの不登校になっている家庭を目の当たりにして、話も聞いていますが、本当に苦勞されています。 学校や教育委員会だけでどうにかできるものではないと思っていますが、その中で今回、西濃学園との連携をはじめ、「共創による子ども支援」という視点で進められていることに、とても期待できと思っています。 学校、家庭、地域の連携だけではなく、行政の縦割りを越えた連携も必要だと思っています。不登校の理由に、「生活リズムの乱れ」や「学

発言者	発言概要
松岡 委員	力低下」がありましたが、それは家庭での過ごし方にも問題がありますけれども、普段私は、子育て支援に関わらせてもらっていて様子を見ていると、家庭が非常に疲弊していると感じています。ほとんどが共働き家庭で、発達障がいやグレーゾーンの子が増えている中で、衣食住を回すだけでも精一杯な家庭もあり、小学生になると、頼れる地域や親同士のネットワークなども失いやすいように感じています。 親にとっては小学校から学校教育という感じに変わっていきませんが、乳幼児期からの延長線上で、子育ての一環であり、国も18歳までの切れ目ない支援に包括的に取り組むと言っていますので、子育て日本一を標榜する大垣市ならではの、教育委員会と子育て支援課や保健センター等、各機関との連携で子育て家庭を支えていただけたらと思っています。 先ほどもお話があったように、親の不安を取り除いていくと、子どもを笑顔で迎えられる。そうすると、子どもの気持ちが安定するということは、とても大切なことだと思います。 また地域も、担い手不足になっているという実感があります。以前は担い手となってくれた祖父母世代も、働いていたり、介護が必要になっているということで余裕がなく、ボランティア頼みでは立ち行かないのが現状だと思いますので、行政の縦割りの枠を超えた新たな地域の仕組みづくりをお願いしたいです。 すでに、子ども食堂や子どもの居場所支援を進めていただいておりますけれども、継続的な小学生以降の居場所支援を進めていただきたいと思っています。 また、文教のまち大垣ということで、企業も一緒に取り組んでいる中で、企業も地域の一部として、例えば、退職者に地域貢献を促す仕組みづくり等、一見、教育とは離れているように感じますが、学校、先生、教育委員会だけでは難しい部分を積極的な連携で豊かな子どもの育ちを社会全体で支えることを体現していくことができれば、不登校の未然防止だけでなく、どこにも繋がっていない不登校親子の居場所の1つになり得ると思いますので、ぜひ、幅広い共創を目指していただきたいと思っています。 もう1点、低学力層への支援ということで、今後、学力向上委員会でも検討されると思いますけれども、細かいことですが、宿題の在り方

発言者	発言概要
松岡 委員	も研究していただきたいと思っています。個別最適な学びとして、授業では理解度に応じた学び方を取り入れているのに対し、宿題が画一的で、できる子にとっては作業的にやっていて、できない子は元から分からないから、ますます宿題をやらない、やらないから提出できないといったことが起きていて、提出してもやり直しが多かったり、そういったことが学校に行きたくない原因になることもあると聞きます。そもそも宿題は必要なのかということも含めて、全国的にも取組事例があると思いますので、検討していただきたいと思います。
石田 市長	ありがとうございます。宿題については検討していかないとはいけません。 それでは、教育長からもご意見をお願いします。
細江 教育長	委員からお褒めの言葉をいただきましたし、ご意見もいただきましたが、総合的に考えていかなければならないと考えています。不登校の児童生徒数が、およそ全児童生徒数の3%に近づいてくる状況の中で、これは学校とか教育の問題というよりは、社会の大きな問題になってきていて、そう捉えながら、色々な方々の力をお借りして、取り組んでいかなければいけないと思っています。 ただ、やはり学校に長くいた人間として、学校という場所が、不登校の未然防止や復帰できる場所という意味でも、一人ひとりの子どもにとって、明日も行くのが楽しい学校づくりを大事にしていくことだと思っています。 そう考えていくと、教師の有り様であるとか、関わり様というのは、とても大きなポイントがあって、私が若い頃に先輩によく言われたのが、「子どもたちは、毎日ランドセルを背負って登校して来るけど、そのランドセルの中には、教科書やノートが入っているだけじゃないぞ。その中には悲しみであったり喜びであったり、ちょっとした辛さであったり、色々なものを背負ってくるので、朝登校して来たときに、その子の顔をしっかりと見て対応しないとはいけません。」とずっと言われました。何が言いたいかというと、やはり、それを感じることができる先生、一人ひとりに寄り添って色々な変化を感じ取れる先生を育てていくことが1番大事だと思っています。 その意味からも、西濃学園と連携させていただいたわけで、長年、不登校の子どもたちを対象に教育をしてきた西濃学園には、一人ひと

発言者	発言概要
細江 教育長	りを大事にしながら、どう寄り添っていくのかということを一生懸命考えてくださったスキルがありますし、そのスキルは私たちにとっても参考になると思っています。 また、長年取り組んでいらっしゃるの、社会復帰した後の追跡調査結果を持っていらっしゃいます。不登校の子が学校では言わなかった本音をそこでは聞き取ることができるので、先ほど委員が言われたような様子は、そこから見えると思います。不登校には色々な要因がありますけれども、我々の調査から見えるものだけではなくて、本当の根の部分が見えたら良いと思っています。 様々な対策を教育委員会として行っていくわけですが、不登校の定義は、30日の欠席を1つの目安にしますが、1日休んだ子どもから、本当に長い間休む子どもがいるので、それぞれの様相に合わせた対策を考えていくことが必要だと思っています。 個々の状況に応じた対応をしたいと思いますので、保護者へのケアも含めて、今まで教育委員会がやってきた手立てにどこが足らなかったのか、どこを強くすれば良いのかなど、総合的な対策を組み立てたいと思っています。その総合的な対策の中には、先程お話が出ましたが、就学前との繋がりもあるし、中学卒業後への繋ぎもあるし、そこも含めた取り組みをしていきたいと考えています。 ただ、基本となるのは、学校に来ている子も、来ていない子も、どの子も主体的に、自立に向かっていく力を身に付け、自分で何とか立ち上がって、自分の人生を切り開いていく力を身に付けることだと思います。 特に不登校になった子は、心に大きな傷を持っていて挫折感がある。それに苛まれて落ち込んでいくのではなく、その子たちが何とか自立する、自立に向かう力を身に付ける場所が必要だと思っています。 それで今回は、なかなか学校とも社会ともコンタクトが取れない子どもたちに光を当てて、何とか対策をしたいという目標を立てたところでは。 居場所をいくつか設定していますが、その場所は居着いてしまっただけではいけない場所だと思っています。次の場所に何とか変わっていきけるような力を付けながら、その動きこそが自立に向かっていく力になれば良いと思いつつ、色々な施策を整理して講じていきたいと思

発言者	発言概要
	います。また皆様には色々なところでお力添えをいただきますようお願いします。
石田 市長	こども未来部長は何かありますか。
毛利こども未来部長	保育や幼児教育に関わらせていただいた最初の頃に、県内の幼児教育の専門家を集めて懇談会を開催し、色々なレクチャーを受けました。その中で教えていただいたのが、学校就学後は、認知能力が基本で、例えば、学習とか知識とか、そういうことを教わる場所。一方で、幼児教育や保育というのは、いわゆる、非認知能力、コミュニケーションに限らず忍耐力であるとか協調性であるとか、我慢するといったことを非認知能力として身に付けるところということでした。 ノーベル賞を受賞されたアメリカの経済学者でジェームズ・J・ヘックマンという方がいらっしゃいますが、5歳までに良い幼児教育を受けた子どもは、その後20年、30年豊かに暮らせるというのが経済学的に立証されているそうです。そういうことがありますので、先程の話にもありましたけれども、昔は家の中に意地悪なお兄ちゃんがいったり、優しいおばあちゃんがいったり、色々な疑似社会体験ができましたけれども、今はなかなかそれができにくくなってきていますので、そういう事を幼稚園や保育園の中でやるということを大事にしていきたいと思っています。
河合 委員	全然関係ないかもしれませんが、私は明るい選挙推進委員もやっておりまして、その中でも投票率向上に非常に苦戦しております。原因は何だろうと同じように分析すると、無気力が出てきます。さらにそこに無関心と無責任まで出てきます。 そのような大人ばかりの状況で、投票率が上がってこないからどういう施策を講じるかということを考えていましたが、逆に言えば、そういう大人を直していくことも、子どもたちに対する対応の1つになってくるのではないかと思います。 この間も大垣市民プールで、中学生の子どもたちが問題行動を起こしましたけれども、そういうことを含めて大変驚かされますが、そういうことが不登校の根底みたいなのところに、あるのではないかと思います。
石田 市長	県内では初めてになりますが、8月18日に大垣市こどもまんなか応援サポーター宣言をさせていただきました。大垣市は子育て日本一を目指

発言者	発言概要
石田 市長	標として、幼児から大学生まで子育てに関して一生懸命やっておりますが、私になって、「実感できる」という言葉をつけて、実感できるような街にしていこうという施策も付け加えながら取り組んでおります。 そのような中で、宣言をして何か変わるのですかと良く聞かれます。これは皆さんへの意識付けだと思います。親、子ども、それから、地域、企業はもちろんですけれども、色々な所で話をする中で、子どもに対するメッセージは結構あるのではないかと思います。 こどもまんなか応援サポーター宣言をしましたけれど、3つ目のキーワードの中に、「こどもと一緒に取り組むまちづくり」と書いてあるので、逆に何を聞いてくれるのと言われます。ということは、引きこもりで家にいる子どもたちの中にも、何かの拍子にこどもまんなか応援サポーター宣言を知って、何をしてくれるのだろうと考えてくれるかもしれない。そう考えますと、すごく責任は感じますし、やらないといけないと感じております。 また、こどもまんなか応援サポーター宣言に関する新たな施策を考えておりますので、企業、PTA、家庭や地域など、色々な所にご協力をお願いに上がるつもりです。 もう一度こどもまんなか応援サポーター宣言を読んでいただくと3つの柱はどこにでも出てくるような、内容的には新しい事は無いかもしれませんが、やはり意識を持っていただくというのが重要だと考えています。そこから3つの柱に細かい施策を入れ込んでいこうと思っています。今回、こどもまんなか応援サポーター宣言をしたことに対して、1番興味を持ってくれているのは子どもたちです。8階大会議室で実際に子どもたちと遊んだ後に、子どもたちと一緒に子どもを真ん中にして宣言をした、あの写真1枚をとっても、色々な所から様々なご意見を賜れたので、そういうご意見をいただけるのも、意識付けの1つだと思っています。 今回は不登校対応ということで、フリースペースとか、色々なことをこれから考えていかなければなりません。不登校特例校で草潤中学校のような学校や、子どもの居場所で児童館をつくってほしいと言われるけれども、一般質問でお答えしたとおり、子どもの居場所、イコール児童館ではないと思っていて、大垣市には地区センターが各地

発言者	発言概要
石田 市長	にあります。その中にスイトピアセンターやサイエンスプラザもありますので、これをいかに活用していくか、新たな物を建てるということではなく、そうした形の中で子どもたちの居場所をつくっていかねばいけないと考えております。 不登校対応というのは本当に大きすぎて難しい問題だと思っています。今日ここで皆様からお話をお聞きして、じゃあこの方向でと1つの結論が出るものではないとも思っています。西濃学園との協定は大変評価をいただいているようですけれども、ただ協定を結んだだけでは意味がないので、次にそれをどう活かしていくのかということが1番大きな課題ですので、そこをしっかりとやっていきたいと思っています。
石田 市長	次に、全体を通じて、何かございましたら、ご発言をお願いいたします。 副市長何かありますか。
豊田 副市長	今回、教育委員会から不登校を議題としてお話しさせていただきましたけれども、市としてもこの不登校の問題は全市的な対応ということで、先程こども未来部は幼児教育で、都市計画部ですと、大垣公園でプレーパークを実施して指導員が子どもと一緒に遊んだりというのがあったり、また、市民活動部ではボランティア団体のような形で、あらゆる部局が子どもと接する機会がある中で、この情報をそれぞれの部長が共有して、市をあげて子育て日本一に取り組んで参りたいと思っています。教育委員会、あるいはこども未来部だけでなく、これを市の主要な課題ということで進めるためにも、引き続き皆様からご意見を承りたいと思いますので、よろしくお願いします。
石田 市長	それでは、最後に教育長お願いします。
細江 教育長	副市長もおっしゃったように、総掛かりでやっていかないとなかなか子どもの姿には現れてきません。要するに、子どもに起きている事は、先程委員が言われたように、大人の世界や社会の縮図なので、やはり色々なことに興味が持てないとか、積極的にやれない社会が子どもに映っていると思います。我々教育委員会は、主として子どもに関わっていきませんが、子どもが変わりながら、それが大人にも波及していくと良いと考えています。是非お力添えをお願いします。
石田 市長	今日はいろいろご意見を賜りありがとうございました。子どもたちは次の時代を担ってくれる未来の大垣の宝ですので、ここを大事にし

発言者	発言概要
石田 市長	ないと、大垣市未来ビジョンの30年後がどうになってしまうのかという話になりかねません。また細部にわたりまして、ご支援をお願いしたいと思います。 本日はありがとうございました。

閉会